

# 図書館通信 —68—

1984. 7

## 着任の所感

附属図書館事務部長 酒井 豊

内藤前事務部長の後任として附属図書館にきてから3カ月が経過したが、ここで御挨拶に代えて着任以来感じていることを述べさせて頂くことにした。

まず最初に強い印象を受けたことは静岡大学全体の景観である。特に南西の東名高速道路沿い辺りからの眺めは全く偉容というか巨大な建物の群れに目を見張る思いがした。図書館は丁度その中央に位置しており、堂々たる建物で、「図書館はなんといっても建物だよ」といったさる先輩の言葉が思い出される。逆に図書館の閲覧室（5階）から南西の方を見ると、これまた素晴らしい眺望が開ける。空気の澄んでる時は焼津のはるかかなたの御前崎の方まで望むことができる。朝開館と同時に入ってくる利用者は、まず眺めの良い席を取る権利があるわけで、ときどき疲れた目を癒すため遠くをぼんやり見ることができるのである。階段の昇り降りが大変だとか閲覧室の床があまり奇麗でないとか多少の問題はあるにせよ、この眺望絶佳はすべての欠点をも吹きとばしてしまうほどである。それに階段は適当に分断され、曲り角をつけられ、いつのまにか入口まで昇って行けるようになっているのでそれほど苦にはならないようだし、学生さんの中には側面の非常階段を一気に昇ってくる方も少なくない。昔（昭和22年）私が最初に勤務した東大図書館も3階のメインフロアに行く大階段が51段あり、当時の学生さんは栄養不良でほとんどが途中のおどり場で一息いれていた。時代は移れりである。

ところで図書館にとって景色とか階段とかよりも重要なことは勿論いくらでもある。図書費の問題、図書の選定方法、目録の質、職員の養成、相互利用等々枚挙にいとまないほどである。その中で学術情報システムへの対応ということが現在大学図書館にとって最大の重要事項といえるだろう。私の長い図書館生活を振り返ってみて、大学図書

館界にこのように大きな旗印が掲げられたのは2回目である。1回目は昭和37年頃から始まった「大学図書館の近代化」ということで、それまでの単なる図書の倉庫から利用者本位の図書館への脱皮、また特に東京大学では各部局の図書館は学内他の図書館から孤立し、収書、目録、奉仕等の調整がなくて「巨人の死骸」と評されたほどであったが、当時の岸本館長が掲げた大学図書館の近代化という旗印のもとに克服することができたわけである。そして10年後には近代化という言葉が機械化に置き換えられ、さらに学術情報システムへと発展してきたのである。

学術情報システムとは、いうまでもなく学術審議会の答申に発するものであるが、全国の大学図書館、大型計算機センター、国立大学共同利用機関をコンピューターと通信回線で結んだネットワークで資源共有の理念の下に研究者に対し迅速、的確に必要な情報を提供するシステムであり、その中核に学術情報センター（現在は文献情報センター）を置き、情報検索及び図書館資料の目録・所在情報の蓄積・提供のサービスを実施することになる。

ますます激増していく情報量の中で図書館はもう自分一館だけでは生きていけなくなっているものであり、そのことは相互利用からさらに一歩進んで資源共有の理念を前提としていることから窺える。静大図書館もいずれこのネットワークに参加せねばならないが、そろそろ具体的に加入方法を検討する時がきたようである。

### もくじ

〈私のすすめたい本〉	
『原爆体験記』（朝日選書）	2
照葉樹林文化論の魅力	3
共同執筆の苦労話	4
資料案内	5
お知らせ	6

## 〈私のすすめたい本・50〉

広島市原爆体験記刊行会編『原爆体験記』（朝日選書 42, 朝日新聞社刊）

日野資純

この本は、太平洋戦争末期の1945年8月6日、米軍によってわが広島市に投下された原子爆弾による被爆体験を、当時の市民がありのままに記しとどめた記録である。

この原爆一発による死者と行方不明者は約20万人と推定されているが、現在米ソ両国の核兵器の保有は、この広島型原爆に換算して100万発分以上だという。その根源となった一発の恐ろしさについて、当時の被爆者たちが、戦後2年目の1947年に、市長の体験記募集の呼びかけに応じて投稿した原稿が160編以上になった。その中から原文のままのもの18編、抜き書き16編が選ばれている。

1950年に一度印刷され、原爆の日8月6日を期して出版される予定であったが、米軍の占領政策によって不可能となった。そして1965年にやっと朝日新聞社から刊行され、1975年には朝日選書に収められて普及するに至ったのである。

原爆の悲惨さについては、今日、映画（羽仁進監督の「核狂乱の時代」など）や写真（「広島・長崎原子爆弾の記録」1978年）の記録、丸木夫妻の「原爆の図」などによって、映像としても残されているのであるが、これを“体験記”という文章の形を通して受け止めることも非常に大切だと思う。

まず、本書の“刊行のことば”（1950年）は、現在もなお重要な意味をもつ。

人類の誰しも経験したことのないあの大変難に堪え、あらゆる苦悩と悲しみのどん底に生き抜き、そして立ち上がった人達のこの聖なる手記は、二つの世界の激しい対立の嵐吹きすさぶ中に、天来の平和の訴えとして人の子の耳を傾けさせないであろうか。

全編に人類最初のすさまじい体験がにじみ出ているが、当時軍事監理局勤務であった21歳の女性は、爆心地から750mほど離れていた建物の2階で被爆した。その時の状況を、こう記している。

午前八時十五分……窓べりに座っていた私は、オレンジ色のような、紫のような、マグネシウムのような光よりもっと強烈な光に眼を射られ、頭上からのしかかったような熱気と圧力に、からだが一回転したように感じた。……頭の上に落ちてくる砂や小石にハッと気がついた。真暗である。……この時頭から肌の中

へ流れこむ生温かいものに……手をやるとぬらりとした。

彼女は同僚の女性とともに何とか外に逃れたが、外の様子がまたすさまじい。

家のほりにおさえられて助けを呼んでいる人、半狂乱のようになってケラケラ笑っている子供、死せる幼子を抱きつつ走って行く母、負傷した者は血の流れるまま、着物もなく体に火傷をしてはれている人、泉邸への道は地獄絵そのままの行列だ。

結局彼女はわが家の跡地で両親、妹と再会するが、二週間目から両親も妹も原爆症にかかり、彼女だけを残して亡くなってしまふ。1965年に私が初めて本書を読んだ時、この文章の末尾にあった文字——筆者は広島市内に健在——、これだけが唯一の救いだった。今も健在なら60歳……。

ただ、戦争体験を述べたり紹介したりするさいには、被害者意識だけにとらわれていてはならない。わが国自身、米英を初めとして、中国、韓国、東南アジアの諸国民に対して多くの犠牲を払わせたのである。なお、特に今日のように“国を守る気概”が強要されるような傾向が年々強まっている時には、外に対して「守ろう」と身構えるのではなく、憲法にうたわれている平和主義に徹して、再び悲惨な体験を繰り返さぬためには何をなすべきかを考えなければならない。そして、その原点に立つためにも、本書は必読の文献である。

なお、映像の面から訴えかけてくるものとして、NHK編『劫火を見た——市民の手で原爆の絵を——』（1975年刊）がある。被爆体験を描いた103枚の素朴な絵を集めているが、原爆の赤い火の玉が、5秒前から1秒前まで、1秒ごとに巨大化するさまを見せられると（当時35歳の男性）、生きた心地もない。現在（1984年6月）の時点では、未来の核戦争を回避するための一歩として、ジュネーブでの核軍縮交渉がみられることをひたすら望むものである。（人文学部・国語学）

〈私のすすめたい本・50〉

## 照葉樹林文化論の魅力

杉山公男

仕事で忙しい時には、かえって自分の専門とは全く関係のない本を読みたくなるものだが、さりとて単なる気晴らしのための読書はある種の空しさを感じさせることも多い。そんな時に私は、日本文化論や日本文化起源論などに関する本を読むことにしている。私の専門のせい、食生活の歴史や食事文化が人間の思想や心理にどのような影響を及ぼしているかについていささか興味を持っているからである。しかし勿論、私はこの方面については素人であるから「私のすすめたい本」として紹介するのは気が引けるが、こと照葉樹林文化論に関しては農業や農村に関心を持つ契機となりうと思うので、敢えて関連の本を紹介する次第である。私の照葉樹林文化論との出会いは学生時代で、中尾佐助\*『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書 1966）においてであった。彼は、人類文化の根元である農業の歴史は栽培植物の中に書き込まれているとの認識のもとに、世界の農耕文化の原型を4大別した。そしてそのうちの一つである東南アジア起源の根菜農耕文化が温帯林である照葉樹林帯に伝播・発達したものを特に照葉樹林文化とよんだ。照葉樹林文化の成立したのは西はヒマラヤ南面から、シナ南部、日本本州南半部にわたる地域で、きわめて山岳的性格をもつ文化であり、茶と絹と漆、柑橘とシソ、それに麴カビによる酒などが代表的な文化遺産であるという。この文化は南の根菜農耕文化からイモ類を受け取り、一方で西方からは雑穀類やムギ類の栽培をとり入れ焼畑段階に発展し特色ある農耕文化複合を形成するが、鉄器時代に入る頃には照葉樹林文化の独立性は死滅したというものである。雄大な構想と、「片寄った」文化観に対する悲憤から書かれたこの本に私は非常に感銘し、文化人類学や民俗(族)学にも興味を持つきっかけになったように思う。

日本の伝統的な文化は「稲作文化」として特徴づけられているが、佐々木高明は\*『稲作以前』（NHK ブックス 1971）で、イモと雑穀類を主作物とする焼畑農耕文化が西日本において稲作以前に展開していたことを論証し、それは中尾の「照葉樹林文化の発展における焼畑段階」に該当するものと考え、照葉樹林焼畑農耕文化と名付けた。この佐々木の指摘は、日本の文化を稲作文化として安易に規定しがちな従来の一般的考え方を超え

て、日本の基層文化に畑作文化の重要性を認めた点で画期的である。栽培植物学者である中尾によって提唱された照葉樹林文化論は、文化人類学者である佐々木により肉付けされた観がある。佐々木の近著\*『照葉樹林文化の道』（NHK ブックス 1982）は照葉樹林文化論の全容を知るうえで必須であろう。

稲作以前の焼畑農耕をそのクライマックスとする照葉樹林文化論は、必然的に日本の縄文文化との関係を問題にされざるをえない。安田喜憲は\*『環境考古学事始』（NHKブックス1980）の中でこの点を縄文期の植生変遷の面から論じている。彼は、縄文文化は落葉広葉樹林の伝統に根ざした文化として出発し、当初は照葉樹林とは何の関係ももたなかったが、縄文時代前期以降の照葉樹林の拡大に伴って照葉樹林文化の要素が新しく縄文文化に付加されたと見るべきだとし、照葉樹林文化論による安易な一元化を戒めている。この本は日本列島における人間と自然とのかかわりを考えるうえでも好著だと思う。

日本文化論は怪しげなものも含めて多数ある。その多くは、例えば牧畜文化と農耕文化といった異質文化の比較に基づくものであるが、照葉樹林文化論はアジアにおける同質文化の比較論という点が特徴であろう。同質性の強調はある面では「危険性」を孕んでいるが、今後の照葉樹林文化論の展開を見守りたいと思う。なお、照葉樹林文化に関連したその他の手頃な本としては、上山春平編\*『照葉樹林文化』（中公新書1969）、上山他\*『続・照葉樹林文化』（同 1976）、守屋毅\*『お茶のきた道』（NHK ブックス 1981）などがある。また中尾佐助の著書はどれも興味をそられるものばかりであるが、『秘境ブータン』（教養文庫 1971）は特に一読をおすすめする。（農学部・栄養化学）

（\*印は本館所蔵を示す）

## 共同執筆の苦労話 —『有機反応 I, 脂肪族化合物』がでるまで

片桐 孝夫

これまでも事典の一部などの紙数の少ないものを手掛けたこともありましたが、此度教科書的な参考書のシリーズの一部を書いたので、その時の経験など、学生諸君のあまり知らない部分にふれて、本を読む時の参考にでもしていただければと思って筆をとりました。

この講座は7大学の教官15名によって、全10巻の構成でそれぞれ分担したのですが、有機化学全般を網羅し、しかも大学院生を対象とすることから、分担を決めるのに、総括責任者である京都大学丸山和博教授は大変御苦勞されたのではないかと思います。先ず15名の顔合わせが4年前に行われ、出版までの大凡の計画が立てられ、初めの巻を1983年初めに発行することとして、逆算してゆき、1982年3月に原稿を切りたいとの本屋(丸善)の注文もあり、出版までの計画を立てたわけです。

各巻は講座の一部ではあるが、単行本として独立した性格も持たせるため、多少の重複はやむをえないとしても、全く同じことを書くことは避ける必要があります、その調整のために先ず「項立て」を行いました。これは目次を含めた内容紹介をしたもので、一人で書く場合とは違い、相当詳しく書くこととなります。これだけでも1巻当たり約4枚となりました。これが全員に配布され、それを参考に自分の担当している所の内容を考えてゆくわけです。例えば、ある部分については他の巻で詳しく述べられるとすると、その部分はこの巻では簡単に触れておこうとか、他の巻ではほとんど触れられていない項については、この巻で詳細に述べようとか、断えず責任者と手紙のやりとりなどを交えながら調整してゆきます。1980年10月頃にこの作業が終わり、執筆の構想も固まった所で、新しい文献の調査などの準備をします。本務のあい間にするのでですからどうしても時間がかかりますが、この作業を約半年で終わり、いよいよまとめの執筆に入るわけです。このようなシリーズもので先ず注意しなくてはいけないことは言葉使いです。つぎに科学書ですから単位の問題があります。さらに図は、表は、化学式はなどの多くの事を統一するため、「執筆の手引」が作られ出版社から送付されます。これに従って執筆するわけですが、今回は単位は今迄慣れてきている

CGS単位でよいということになったので大分楽ではあったのですが、あとになってどうしてもSI単位でなくてはいけない所も出てきて換算したりした所もあります。文は専門としている所を担当しているわけですから、比較的楽に書け、また化学式もいつも親しんでいるものを使いますのでそれ程苦にもなりません。しかし、誤字や送りがなに気を使うので、いつも辞書を側に置いて書くこととなります。また自分達の研究室で現在進行中の研究も一部を織り込みながら、一般的な記述をする必要がありますから、大変気を使い、1982年3月に原稿が仕上がりました。私の手を離れてからは責任者は大変です。先ず読み通し、言いまわしの統一をします。つぎに誤りのある個所がないかをチェックし、部分的に修正を加えて、いよいよ出版社に送付です。

出版社では、先ず複雑な化学式や引用文献の版組みをいたします。それとともに活字を並べて版を組上げてゆくわけです。ゲラ刷ができると校正になります。ここは出版社の編集者の腕を問われる所で、編集者が良くないと文章と図の位置が入れかわったりして校正も大変です。私の場合、幸い名大理学部化学教室を出た女性編集者で、とうっかり見落としていた所を教えてもらったりして大変助かりました。2回目の校正も終わり、出版社は前宣伝をして、いよいよ出版となります。1983年1月にシリーズの第1冊目が出て、本年2月になって私の担当した『有機反応 I』が出版されました。

1980年に話があって出版迄に丸4年が過ぎ、シリーズものの作成の困難さが身にしみた次第で、これからは本を読む時に、その本の裏にある労苦を考えながら読めるのではないかと思います。学生の皆様も、一冊の本に注がれた努力を感じて、是非大切に扱っていただきたいものと思います。

経験を通して得たものを皆様にお伝えして、今後の参考になればと思っております。

(工学部・有機合成化学)

丸山和博編 『有機化学講座 1 有機反応 I, 脂肪族化合物』 世良明、片桐孝夫、速水醇一著  
(本館、浜松分館で所蔵)

## 〈資料案内〉

## 全国共同利用図書(大型資料)一覽

昭和57年度

この資料は、文部省の大型図書購入費の配分により、昭和57年度に各国立大学で購入された大型コレクションで、全国共同利用となっているものです。(昭和53年度～昭和56年度分については、本「通信」No.62を御参照下さい)

資料の内容及び閲覧、利用については参考調査係にお問合わせ下さい。

## 大学名 資料名

〈外国図書〉

北海道：ソ連の対外関係に関するエプシュタインの蔵書

東北：米国連邦議会委員会刊行物総集成

図書館情報：図書館情報学関係学位論文集成

(1930～1980年)

筑波：旧メキシコ大統領ディアス旧蔵コレクション

千葉：フランス史資料集〔Collection de documents inédits sur l'histoire de France. 325vols.〕

東京：米国連邦議会資料集(1915～1969年)

：デルゲ版チベット大蔵経

東京外国語：ペルシャ研究基本文献コレクション

東京商船：運輸問題関連文献集成(1921～1971年)

お茶の女子：女性史コレクション

上越教育：心理学研究論文抄録(1927～1978年)

金沢：独議会議事録—ドイツ連邦共和国議会議事録(1949～1980年)

：仏議会議事録—フランス革命期議会議事録(1787～1799年)

名古屋：英国近世初期書籍集成(1475～1640年)

京都：ゴールドスミス、クレス図書館所蔵経済学文献集成

：デルゲ版チベット大蔵経

京都工芸繊維：メンドロン編著「絵入りポスター」

大阪外国語：ロシア・スラブ言語関係コレクション

神戸商船：ハクルート協会探検航海記録

：太平洋航海記集

山口：ルネッサンス期英国百科叢書

愛媛：世界経済関係資料

九州：英国政府刊行物非議会刊行物

(1922～1977年)

：百部双書集成

九州芸術工科：都市計画研究コレクション

鹿児島：チャレンジャー号海洋探検学術研究報告

琉球：アメリカ公民権闘争の歴史

〈国内図書〉

帯広畜産：日本帝国統計年鑑 明治15年(第1回)～昭和15年(第59回)

宮城教育：故平間初男氏所蔵教育関係図書

東京農工：農業教育用視聴覚資料—スライド、VTR

山梨：文部省選定社会教育映画 体育・レクリエーション編—8ミリフィルム

大阪：赤木文庫蔵「古浄瑠璃」コレクション

島根医科：厚生省、人口動態統計 昭和21～55年

九州：近世後期戯作類コレクション—洒落本、滑稽本、咄本類、中本読本、半紙本合本、狂詩類

## ■教職員著作寄贈図書

〈本館〉

山下秀智(教養部)

『教行信証の世界・中』山下秀智著 北樹出版  
1984(188.71/Y 44/2)

中村博保(教育学部)

『完訳日本の古典 第57巻 雨月物語・春雨物語』高田衛・中村博保校注・訳 小学館  
1983(918/Ka 59/57)

今川氏研究会(教育学部小和田研究室内)

『駿河の今川氏 第4—7巻』今川氏研究会編  
(小和田哲男ほか著) 静岡谷島屋 1979—1983  
(215.4/Su 76/4—7)

〈浜松分館〉

大月卓郎・市川朗(工学部)

『パソコンプログラム理科系のための問題演習』

W・R・ベネット著 大月卓郎・市川朗訳

現代数学社 1983(549.92/1219)

竹内康博・丸山哲郎(工学部)

『パソコンプログラム文科系のための問題演習』

W・R・ベネット著 竹内康博・丸山哲郎訳

現代数学社 1983(549.92/1220)

片桐孝夫(工学部)

『有機化学講座1 有機反応I 脂肪族化合物』

片桐孝夫他著 丸善 1984(437.01/394/1)

## ■図書館委員会委員名簿 (昭和 59 年度)

図書館長	大月卓郎	
分館長	藤田郁夫	
人文学部	日野資純	村上義和
教育学部	深山正光	今山延洋
理学部	橋爪裕司	山下繁男
工学部	佐々木 彰	
農学部	加藤芳朗	岩川 治
教養部	上村大輔	中野偉夫
電子研	山口十六夫	安藤隆男
電子科研	渡辺健蔵	堀部安一
法経短大	山本 正	
本部	垣谷雅一	
図書館	酒井 豊	

## ■図書館委員会報告

昭和 58 年度 第 5 回 S 59. 3.16

### 議事

- 1 昭和 59 年度図書館経費の編成方針について審議し、従来どおりとすることとした。
- 2 昭和 59 年度図書資料 (大型コレクション) 取書計画調書について、2 点を提出することとした。
- 3 静岡大学附属図書館事務分掌規程の改正について報告があった。

昭和 59 年度 第 1 回 S 59. 5.11

### 議事

- 1 昭和 59 年度図書館運営費予算案について審議し、委員会として原案を了承した。また昭和 59 年度学生用図書購入費配分額及び指定図書購入費分担額について審議し、原案を了承した。なお維持費検討委員会は、本年度も特別なことがない限り開催しないこととした。
- 2 昭和 60 年度概算要求事項として、図書館職員の人員増と電子計算機を要求することを了承した。

## お知らせ (本館)

### ◎夏季休業中の長期貸出

貸出冊数：5 冊以内

貸出開始：昭和 59 年 7 月 2 日から

返却期限：昭和 59 年 9 月 17 日まで

### ◎臨時休館

昭和 59 年 7 月 23 日(月)～7 月 28 日(土)ノ

## ◎他大学の図書館への紹介

他大学の図書館の資料を利用したい人には、紹介状を発行しています。卒業論文やレポートの作成などにご利用下さい。

希望者は参考調査係の窓口まで。(大学院生は、共通閲覧証を利用して下さい。)

## ■人事異動 (本館)

昇任 (59. 4. 1 付)

酒井 豊 東京学芸大学整理課長→事務部長

石原良江 整理課整理係員→整理課整理係長

配置換 (59. 4. 1 付)

島村敏子 整理課整理係長→整理課受入係長

望月信夫 整理課受入係→閲覧課運用係

塚本雅美 閲覧課参考調査係→整理課受入係

増井三男 整理課総務係→人文学部会計係

大石啓之 附属養護学校事務係→整理課総務係

採用 (59. 4. 1 付)

真中 進 閲覧課参考調査係

退職 (59. 4. 1 付)

内藤 正 事務部長

吉田玲子 整理課受入係長

## ■昭和 59 年度「図書館通信」編集委員

館長 加藤芳朗 (農) 山本 正 (法短)

大石啓之 美濃部京子 中島規恵 山本 孝

## ■訂正

第 67 号に掲載いたしました中村博保先生の“辞書・ことばと文化”中、下記の誤植印刷がありました。ここに改めて訂正し、お詫びいたします。  
p. 1 の 24 行目 『言葉』を『言語』と訂正。

## 〈静岡・清水市内の図書館〉

館 名	住 所	電 話
静岡県立中央図書館	谷田620	62-1241
静岡市立図書館	大岩本町29-1	47-6711
静岡女子大学図書館	谷田409	62-0336
静岡薬科大学図書館	小鹿2-2-1	85-6186
常葉学園大学図書館	瀬名1000	63-1125
静岡英和女学院短大図書館	池田1769	61-9201
常葉学園短大之山文庫	瀬名1480	61-1313
清水市立図書館	桜ヶ丘町7-1	52-6411
東海大学附属図書館清水分館	折戸3-20-1	34-0411

静岡大学附属図書館報「図書館通信」  
発行所 静岡大学附属図書館  
印刷所 (株) 黒船印刷

第 15 巻第 1 号 (通巻 68 号)  
静岡市大谷 836  
静岡市登呂二丁目 10-8

1984 年 7 月 10 日発行  
TEL (37) 1111  
TEL (86) 0236